AL NEWSLETTER
アクティブラーニングニュースレター
Volume 9, No. 3
December 2023

～ 目次 ～

◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
◆ EX 部門アクティブラーニング関連プロジェクト活動報告
・ アクティブラーニング型授業モデルの開発(p.1)
・ ワークショップの開催(p.2)
◆ お知らせ
・ 統合報告書 2023～IR Cubed～での取り組み紹介(p.4)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングは駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS、東京大学駒場キャンパス 17 号館 2 階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとりいれる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。気になる記事がありましたら、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 Educational Transformation(EX)部門（旧アクティブラーニング部門と初年次教育部門・自然科学教育高度化部門が統合する形で 2023 年 4 月に新設）までお問い合わせください。（若杉）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（若杉）

◆ EX 部門アクティブラーニング関連プロジェクト活動報告

2023 年 4 月に発足した EX 部門においても、旧アクティブラーニング部門のプロジェクトを継続して取り組んでいます。2023 年度のこれまでの取り組みを紹介します。

アクティブラーニング型授業モデルの開発

アクティブラーニング型授業のモデル開発として、2023 年度 S セメスターは 2 授業を開講しました。各授業の概要やアクティブラーニング型受業モデルについて得られた知見を簡単に紹介します。

(1) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: SDGs を学べる授業をつくろう

この授業の開講は 4 年目になります。授業の目的は、SDGs について高校生が効果的に学べるオンライン授業を設計してみることで、SDGs についての自身の学びを深めることでした。授業の進め方は昨年度と同様でした。

一方、グループで設計した授業を発表する中間発表、最終発表では、Google フォームとスプレッドシートを用いた相互評価フィードバックツールを使いました。グループごとの発表に対して、受講生一人ひとりが Google フォームで評価を行います。たとえば、グループが設計した学習目標は授業設計の理論に基づいたものになっているか選択式で回答したり、良い点・改善したほうがよい点を記入したりします。その評価（回答）は、教員の Google Drive のスプレッドシートに送信されます。スプレッドシートに記入されたフォームの内容を、グループごとに閲覧可能なスプレッドシートに自動転記されるよう

設定します。これにより、受講生どうしの相互評価を電子的に即時に発表者にフィードバックすることができます。詳細はいずれウェブサイトで紹介しようと思います。

学期末の学生の感想では、「授業前はSDGsをなんとなく『いいもの』として捉えていただけだったけれど、授業を通じてSDGsについて学び考えていく中で、SDGsの背景、意義や課題、いいところや不十分なところについて考えを巡らせ、考える対象としてのSDGsを捉えることができるようになったと思います。」、「SDGsに関する知識や興味はかなり増えました。授業を受ける前からSDGsに少し興味を持ってはいたのですが、当時はSDGsのよいところばかりを探そうとしていたような気がします。この授業を受けることでSDGsの課題にたくさん気づくことができ（特に包括できていない問題がある、というのは私にとって新たな発見でした）、自身の視野の狭さを痛感するとともに、SDGsについてもっと知りたいという気持ちになりました。」などが見られました。（中澤）

(2) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 未来の学びを考える【文献講読編】

昨年度Sセメスターに引き続いて、今年度Sセメスターも開講しました。授業の流れは昨年度と大きく変わらず、教育・学習に関する文献を読み、文献の内容や自身の経験の意味を理解した上で、「10年後の未来の学びがどうなるか」について自分なりに考えることを目的としました。

昨年度と変更した点は、まず、最終成果物です。昨年度は、「10年後の未来で誰が、どこでどのように学んでいるか」の内容とその理由・根拠を600～900字以内のレポートで執筆してもらいました。今年度は、「10年後の未来で誰が、どこでどのように学んでいるか」の内容とその理由・根拠を実際の場面を説明する物語の形式でまとめてもらいました。物語で示してもらったほうが、考えている学びの場面をより具体的に知ることができると考えたからです。実際の学生の最終成果物を見ると、昨年度よりも生き生きとした学びの場面を感じることができました。

次に変更した点は授業方法です。具体的には、生成AIを授業に取り入れました。前号（Vol.9, No.2 https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/publication/#newsletters）で紹介した活用事例①、③は、この授業で行ったものです。事例③で紹介した生成AIの使用について学期末に尋ねたところ、「色々と文献で知識を入れ、学生の知識量がほぼフラット（一定化）された上で、GPTを使い、その内容について議論できたことで、GPTの言う内容への理解や議論がとても深まったと感じる。GPTの活用だけでなく、きちんと文献等で情報のインプットをすることも重要だと感じた。（原文ママ）」などの感想がありました。一方で、「今セメスターに関しては、ChatGPTの完成度の問題もあって思考の手助けになった感はあまり強くないが（略）」という感想もありました。授業での効果的な生成AIの活用について、さらに検討したいと思います。（中澤）

ワークショップの開催

学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワークショップを開催しています。2023年度はこれまでに3つのワークショップを開催しましたのでご報告します。

ワークショップ「第4回東大生がつくるSDGsの授業」（2023年9月3日）

本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習「SDGsを学べる授業をつくろう」を踏まえて開催したものです。授業の中で特に優れた授業案を設計した学生が、高校生を対象とした授業を実施するものです。2020年度から開催しており、今回が4回目の開催となりました。当日は、6名の高校生が画面越しに集いました。

受講者代表による授業「SDGs in Japan～企業にできることはなんだろう～」（平野沙也加 教養学部2年）

一つ目の授業は、SDGs達成に向けた企業の取り組みについて考えることを中心に据えたものでした。まず、参加者はクイズや概説を通じて日本のSDGs達成状況を確認した後、具体例を交えながら日本企業の取り組みやSDGsウォッシュ問題について学びました。続いて、自身が企業の一社員となったことを想定し、「製造業」と「小売業」の2グループに分かれて、SDGsの目標12～15にアプローチできる取り組みを考えるグループワークを行いました。

受講者代表による授業「SDGsマスターへの道～“達成”に向けてできることを考えてみよう～」（大石菜月 教養学部1年）

二つ目の授業は、SDGsの“達成”をひとつの側面として取り上げたものでした。授業内では、①SDGs“達成”について自分の言葉で説明できる、②“達成”に向けて自分たちにできることを考える、という2つの目標を達成するべく、講師からの講義の後、参加者がそれぞれ考えた“達成”に近付くために、グループで自分たちにできることを話し合い、それを全体で共有しました。

授業を実施した学生からは、実施後に次のような感想が寄せられました。

> 一から授業を組み立て、さらに実践するというのは初めての経験で、準備段階から本番に至るまで様々な失敗や苦労もありましたが、無事に授業

を完成させることができて嬉しく思います。参加人数はあまり多くはなかったものの、その分、グループワークやアイディア共有が積極的に行われた印象があり、参加者同士が密に交流することができるワークショップになったのではないかと思います。

私自身、「このトークテーマは難しすぎるかも…」「まとまりのある話し合いができるかな」など不安を抱えつつのワークショップだったのですが、いざ蓋を開けてみると、参加者の皆さんが高い意欲と発想力でたくさんの魅力的なアイディアを出してくださって安心しました。この授業を通じて、SDGs への関心を高め、自分も SDGs 達成に貢献できる社会の一員なんだ！という自覚を持っていただけていたら幸いです。(平野沙也加)

「授業はひとつのストーリー！」。S セメスターに開講された、全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習「SDGs を学べる授業をつくろう」を受講した際に私が学んだことの一つです。授業準備では、このストーリーをつくるということに最も頭を悩ませました。講師としての自分の頭の中では授業の自然な流れができているつもりでも、参加者の目線で授業を見直すと、飛躍があって分かりづらい。授業内で伝えたい知識や技能だけでなく、それらをいかにストーリーとして構成するか、ということも、授業には必要不可欠なことだと気付きました。

ストーリーをつくるなかで、「このワークでは参加者はどんな意見を出すだろう？」と想定する必要がある場面もありました。いくつか想定していたのですが、実際に授業内で参加者同士のグループワークを覗いてみると、私が想定していた答えを遥かに超える質と量の意見がたくさん出ていて、私自身も大変勉強になりました。講師としても学習者としても、貴重な学びの機会を得ることができ、非常に嬉しく思います。(大石菜月)

参加者の高校生からの反応も肯定的なものが多く、授業を実施した学生の感想とあわせて、「教えることで学ぶ」という授業・ワークショップの所期の目的が一定程度達成されていることがうかがえてうれしく思います。一方、今年度は参加者数が少なかったため、開催形態の変更を含め、来年度に向けてさらなる改善に向けた検討を進めていく所存です。参加者は高校生ですが、教員の見学も受け付けておりますので、是非一度様子をご覧いただけますと幸いです。（中村）

駒場アクティブラーニングワークショップ「アクティブラーニングで生成 AI を活用する」（2023 年 9 月 8 日）

東大で授業を担当されている先生方を対象に駒場アクティブラーニングワークショップ「アクティブラーニングで生成 AI を活用する」を開催しました。当日は、14 名の方が参加されました。

東京大学では「AI ツールの授業における利用について」(https://utelecon.adm.u-tokyo.ac.jp/docs/ai-tools-in-classes)が公表されており、授業における生成 AI 利用の注意点がまとめられています。生成 AI の授業での利活用は、こうした方針を踏まえながら行うことが求められます。本ワークショップでは、「生成 AI」を取り上げ、こうした方針とアクティブラーニングを効果的に進めるポイントを踏まえた上で、学習を深める生成 AI の活用を検討することを目的としました。

ワークショップの趣旨説明や参加者どうしの自己紹介を行った後、生成 AI の概要（定義、生成 AI サービスの特徴）と文部科学省や東京大学での対応方針のミニレクチャーを行いました。また参加者が実際に生成 AI を操作するワークに取り組み、生成 AI サービスごとの特徴を把握したり、得られた回答例の共有を行いました。次に、一般的な授業デザインの方法のミニレクチャーを踏まえて、参加者が自身の授業について学習目標・評価方法・学習内容を検討しました。休憩を挟んだ後、アクティブラーニングでの効果的な生成 AI 活用のポイントと、生成 AI 活用事例のミニレクチャーを行いました。活用事例では、4 つの活用方法が紹介されました。その後、それまでのレクチャー内容を踏まえて、先ほど考えた自身の授業をアクティブにする方法と生成 AI の活用を参加者が検討しました。また検討した内容をグループで共有し、互いにコメントし合いました。最後に、ワークショップのふり返りとして、ワークショップを通じて新しく知ったことを書き出して共有してワークショップを終えました。

ふり返りワークの様子

ワークショップ後のアンケートでは、「本ワークショップで学んだことを自分の授業準備・実施で活用できると思う」という質問に対して、まったく当てはまらない～かなり当てはまるの 5 件法で尋ねたところ、14 名中 10 名がかなり当てはまる、4 名がまあまあ当てはまると回答しました。

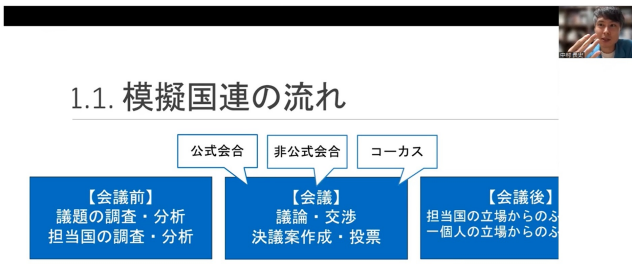
一方、「本ワークショップによって、今後の授業への不安が軽減された」については、かなり当てはまる 3 名、まあまあ当てはまる 9 名、どちらとも言えない 2 名の回答でした。アクティブラーニングや

生成 AI の活用に関する不安はすべて解消されたわけではないと思いますし、今後もワークショップの開催やウェブサイトなどを通じて、アクティブラーニング、生成 AI の活用について情報を提供していければと思います。（中澤）

第 7 回模擬国連ワークショップ（2023 年 9 月 21 日）

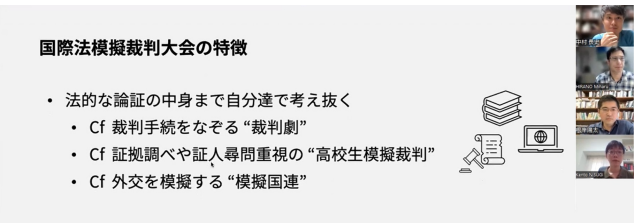
本ワークショップは、全学自由研究ゼミナ ール／高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅰ・Ⅱ」（2023 年度はⅠ・ⅡともにＡセメスターに開講）を踏まえて開催したものです。学内外の大学・高校教員を対象として 2019 年度から実施しており、今回が 7 回目となりましたが、27 名の参加者が画面越しに集いました。

ワークショップは 2 部構成としました。セッション 1「模擬国連導入事例から学ぶ」では、模擬国連の概要と本学教養学部の授業への導入例について中村からお話しました。「模擬国連は学びのフルコース」だといわれることもある程学べることが多岐にわたる手法であるがゆえに、導入目的を明確化し、それを受講者に伝えたうえで実施する必要があるという点を特に強調しました。



セッション 1 の様子

セッション 2「模擬裁判導入事例から学ぶ」では、平野実晴先生（立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部）、根岸陽太先生（西南学院大学法学部）、二杉健斗先生（大阪大学国際公共政策研究科）から、模擬裁判を授業に導入する場合の留意点について具体例とともにご紹介いただきました。勝敗がつく裁判を模擬の対象とする以上、（合意形成に向けて論理のみならず妥協も重視する模擬国連とは異なり）法的論理の構築が最重要だとお話になったのが印象的でした。セッション 1 で紹介した模擬国連との異同を意識しながら模擬裁判についてご紹介いただけたことで、各人の導入目的や環境に合った「Taylor-made の模擬国連／模擬裁判」を目指そうという本ワークショップの趣旨が一層クリアになったように思われます。



セッション 2 の様子

中村は学部生時代に模擬国連を経験し、現在はそれを授業に活かしていますが、3 名の先生方もまた学部生時代に経験した模擬裁判を授業に活かされているとのことでした。これまで模擬国連と模擬裁判との交流は必ずしも盛んではありませんでしたが、鍛えられる知識・技能が似て非なることから、今後は連携して教育に当たれればと考える次第です。

参加者からは、「模擬国連や模擬裁判についてあまり知らなかったが、両者の違いや目的、準備や実際の流れなどを具体的に知ることができてよかった」、「模擬国連は『フルコース』であるがゆえに、導入目的を明確化し、優先順位をつけながら準備をすすめていく大切さを学ばせていただきました」「改めて、模擬国連は魅力的な取り組みだと感じましたので、参加する生徒のサポートを最大限できるように、私もさらに勉強しようと思いました」といった声をいただきました。こうした声を励みとして、次は 2024 年 3 月に第 8 回を実施する予定です。（中村）

◆ お知らせ

統合報告書 2023～IR Cubed～での取り組み紹介

アクティブラーニング型授業モデル開発として開講している全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習「SDGs を学べる授業をつくろう」と、受講生の成果報告の場であるワークショップ「東大生がつくる SDGs の授業」が「統合報告書 2023～IR Cubed～」（https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/public-relations/IRIR.html）で紹介されました。ぜひご覧ください。

（奥付）
○発行年月日：2023 年 12 月 15 日
○発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 EX 部門
若杉桂輔・中澤明子・中村長史
○連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
○Web サイト：https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/